

事後評価報告書(日-ニュージーランド研究交流)

1. 研究課題名: 「閉経期女性の骨の健康に対する日本とニュージーランドの機能性食品の併用効果」

2. 研究代表者名:

2-1. 日本側研究代表者: 独立行政法人国立健康・栄養研究所食品保健機能研究部 部長
石見 佳子

2-2. ニュージーランド側研究代表者: マッセイ大学食品学部 教授 Marlena Kruger

3. 総合評価: (B)

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

カロテノイドの破骨細胞分化抑制作用に関して、ゼアキサンチンとルテインが無効であるのに対して、βカロテンが非常に低濃度(0.1μM)でも抑制作用を示す事実は興味深いと思われる。カロテノイドがこのような低濃度で何らかの生物活性を示すことは珍しく、さらなる作用機構解析の推進が望まれる。

その一方で、カロテノイドを取り上げて試験しているが、特にニュージーランドの食品に特徴的な成分とは言えないことも事実である。スチルベン関連物質についても、パッションフルーツに入っているという理由でイソフラボンと組み合わせて実験に用いているが、試験しているスチルベンがパッションフルーツに特異的な成分か否かが不明であり、この点について説明があれば良かったと思われる。また、報告書に記載されたデータは日本グループによるものが主体となっているようであり、ニュージーランド側グループのデータの提示が十分でない印象を受けた。

(2)交流成果の評価について

ニュージーランドへの日本側若手研究者の長期滞在など、研究面での密接なコミュニケーション促進とあわせ、国際的な人材育成の観点からも有用であり、今後、本研究領域で両国間の共同研究を進める上での基盤を構築できたと評価する。その反面、ニュージーランド側からの訪問は研究代表者の Kruger 博士の1度だけであり、人的交流という点では不足を感じた。また、シンポジウム・ワークショップの開催回数も充分であったとは言えないのではないか(2年間で1度、日本で開催)。

(3)その他(研究体制、成果の発表、成果の展開等)

最終報告で示されたデータの図 9 点のうち、ニュージーランド側の成果として報告されたものが1点(Fig.7)しかないのはバランス的に問題があると感じる。実際にほとんどのデータが日本側で出されたのか、ニュージーランド側でもデータ量はあるが、たとえばネガティブデータだったから公表していないのか、という点に関して明確であれば良かった。一方、本プロジェクトでは食品の三次機能(生理機能性)に着眼したが、二次機能(おいしさ)の観点からのアプローチも必要かも知れない。